

イングランドサッカーにおける赤と青の特別性

A Study of the Significance of Red and Blue in English Football

1K07B167-2

指導教員 主査石井昌幸先生

原 久美子

副査寒川恒夫先生

【はじめに】

今日のサッカーではユニフォームが使われ、さらには様々なチームにエンブレム、ロゴマークが存在する。それらをデザインする際に必ず付随してくるものといえば、ユニフォームであれば素材、形、エンブレムやロゴマークで言えば図柄などが当てはまる。そして何より欠かせないものとして、「色」に着眼した。

色彩と言う情報はひとがものを判断するのに重要な役割を持っているにも関わらず、色彩を特別に感じることは少ない。しかし、色彩にはその土地の歴史的・文化的背景が表われる。イングランドの試合では、赤VS青といったチームカラーの対決がとても多い。このことは、イングランド文化での赤と青の多用と深く関係すると考えた。さらにイングランドにとって深い意味合いが隠されているに違いない。色彩を辿ることで、様々な歴史や文化が見えてくる。数ある欧州サッカーリーグの中でも実力を見せるイングランドサッカーの歴史を知るには、それにまつわる色彩を知ることが必要であると考え、この研究に着手した。

【第一章】イングランドサッカーにおける使用色の傾向

イングランドのプレミア・リーグ各チームのユニフォーム・エンブレムを例に、それらに使用される赤と青の割合を調べ示した。さらにそれぞれのチームカラーの由来と歴史を調べ、赤と青が選ばれる意味を考察した。赤、もしくは青のチームカラーが多く選ばれる中、その経緯には多く偶然の歴史が含まれるものの、赤と青の使用率は高い傾向にあった。また、色彩調和論の観点から、対の二色として赤と青の組み合わせが必然と多くなる理由として以下のことを挙げた。両色は反対色の関係にあり、真逆のイメージが連想されることから敵・見方の関係として表現しやすい点。二色の識別性が高いことから、ユニフォームなど区別が必要な場面に使用されやすい点。以上のことが、イングランドにおいて赤と青の多用に起因していることが分かった。

【第二章】他国リーグとの使用色傾向の比較

欧州サッカーのうちイタリア・フランスの一部リーグである、セリエAとリーグ1の各チームにおける使用色の傾向を、第一章と同様ユニフォーム・エンブレムから示した。結果、各国により使用色傾向は異なり、それぞれ特徴的な色彩使用の傾向が見えた。イタリアは街並に見る配色方法がユニフォームに反映されていること。フランスでは、国旗に表されているトリコロールの三色が多くチームカラーにも使用され

ていること。このような国ごとの色彩観の違いが見えた。以上のように、こうした色彩の使用傾向には文化・歴史的背景をみることができた。そして、他国リーグのセリエAとリーグ1における赤と青の使用率は五割程度であったのに対し、イングランドでは赤と青の使用率が七割であることから、イングランドにおいて赤と青の多用されていることを改めて示した。

【第三章】色彩の象徴性が持つ普遍性と独自性

民族衣装にはその土地・風土の色彩観が表われるとし、各地域の民族衣装を調べ、その地域の色彩使用傾向を分類し、そのことから世界的に普遍性のある色彩の意味と、民族ごとに異なる色彩の象徴性とその意味を調べた。ここでは、主要五色として、古くから多くの地域で使用が認められている赤・青・黄・白・黒を例に挙げた。そこでは、いくつかの普遍性があるものの、地域、民族ごとに独自の色彩観が認められた。同様に、ヨーロッパ全土で広がる共通した色彩の象徴性を示したのち、次にヨーロッパ各民族における色彩観を調べていった。こうした流れで色彩観を地域ごとに細分化していき、イギリス・イングランドにおける独自の色彩観というものを探った。このことから、ヨーロッパでは赤と青に対してそれぞれに特別な意味があり、イングランドにおいても同様に特別性があることが分かった。さらに、歴史的に赤が貴重な染料としてイングランドで尊ばれたこと、青にも同様に歴史的背景があり、他国とは違った赤と青に対する独自の象徴性が見られた。

【おわりに】

結果、イギリス・イングランドにおいて、「赤」は権威のある色として古くから尊ばれ、王や貴族などの衣装に使用されてきた色、「青」は教養の色として品位のある色であり、さらに島国における海の色という風土色として、古くからイングランド人になじみのある色である、という見解に至った。この意識がユニフォームやエンブレムの色を選択する際に直接的な影響を与えていなくても、潜在的意識の表れとして、イングランドサッカーに赤と青が多くみられるのだろうという見解となった。